

# 新発田が生んだダンテ研究家 —山川丙三郎について—\*

山 田 耕 太

## 1. はじめに：新発田のダンテ研究家と私



蒲原平野の下越から中越にかけての山裾に近い土地からは、人文系の異なる学問領域ではあるが、それぞれ極めて地味ながら根気のいる仕事に沈潜して、膨大な業績を残した学者たちが現れている。旧水原町出身の原久一郎は、トルストイやドストエフスキーの長編作の数々を翻訳して『トルストイ全集』を残したロシア文学研究家である。瓢湖の辺には文学碑が建ち、水原町立図書館には原久一郎コーナーがある。旧安田町出身の吉田東伍は、『大日本地名辞典』全5巻他を残した地名研究家である。故郷の

生誕地には吉田東伍記念博物館がある。旧下田村出身の諸橋轍次は『大漢和辞典』全15巻を残した漢学の碩学である。故郷の生家隣には諸橋轍次記念館が建っている。しかし、山川丙三郎は旧加治川村出身の新発田が生んだダンテ研究家・英文学者であるが、現在は故郷で全く忘れ去られている。<sup>(1)</sup>

山川丙三郎は、現在では、岩波文庫のダンテの『神曲』ならびに『新生』の訳者として知られている。山川丙三郎訳の『神曲』は、現在8種類ある完訳された『神曲』の中で、90年程前に訳された最も古い訳業ではあるが、イタリア語から訳した最も優れた訳として定評がある。<sup>(2)</sup> また、山川丙三郎は、後に東北学院英文科教授となり、そこで英文学・英詩・中世文学・バラードを教えたが、恐らくわが国でバラードを本格的に教えた最初の英文学者である。<sup>(3)</sup>

私自身は今から30年以上も前の大学生時代に岩波文庫版のダンテ『神曲』と出会って主に「地獄篇」「煉獄編」をしばしば紐解いた。最近宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」の中に類似のモチーフの数々を見出して、「銀河鉄道の夜」の構想の着想になったのではないかという仮説を立てて、主に「天国篇」との比較を試みた。<sup>(4)</sup> とりわけ、二年程前から新発田市の「まちの駅」と敬和学園大学との連携のプロジェクトを立ち上げる際に、新発田市出身の人文系の人々を考える機会が与えられて、15年程前から旧加治川村出身であるこ

とに気づかされていたが、岩波文庫のダンテ『神曲』の訳者山川丙三郎のことを真剣に考えるようになった。

そして、山川丙三郎に戦前に東北学院で直接教えを受けて、東北学院大学その他諸大学で英文学を教授されたシェリー研究家の石川重俊先生がおられることを二年程前に『新井奥遼著作集』月報で偶然に知った。一昨年（2005年）の夏に出版社に連絡して東京・三鷹に住んでおられることを教えて頂き、一昨年の秋から石川重俊先生との手紙のやり取りや数多くの貴重な資料を通して山川丙三郎についてご教授頂いた。石川重俊先生は新井明学長と50年近く前からの旧知の仲でもあり、昨年（2006年）4月の初めに三鷹のご自宅を訪問させて頂き、様々なことをさらにお教え頂いた。また、石川重俊先生は90歳を越えるご高齢であるが、お元気であるので、昨年9月22日には敬和学園大学のチャペル・アッセンブリ・アワーで「上館から天国へ：ダンテ学者、山川丙三郎のことども」と題してご講演をして頂いた。その前日には山川丙三郎の出身地の新発田市上館と妻なおの出身地の新発田市本田を短い時間であったがご案内することができたことは幸いであった。石川重俊先生との出会いを通して、私にとって山川丙三郎は一層身近な存在となった。

## 2. 山川丙三郎の生涯<sup>(1)</sup>

山川丙三郎は、1876年3月3日に蒲原郡加治村上館で<sup>(6)</sup> 山川経邦・えきの三男として生まれた。<sup>(7)</sup> 長姉のきぬ、長兄の<sup>でいたろう</sup> 鋺太郎（後に横浜外語の校長となる）、次姉のキミ、三姉のなか、次兄の雄二郎と弟の<sup>つねお</sup> 彝雄の7人兄弟の下から二番目であった。幼少時には叔父の山川仲太家の養子となった。<sup>(8)</sup>

1881年4月に北蒲原郡加治小学校に入学し、1884年3月に同校を卒業した。<sup>(9)</sup> 1885年に新発田町商業学校に入学し、1889年3月に同校を卒業した。<sup>(10)</sup>

1889年9月に二年前に開校した北越学館に入学した。<sup>(11)</sup> そこで、後に東北学院第3代目院長となる五十公野出身で3歳年上の出村悌三郎と知り合い、後に親しい関係になった。1892年に山川丙三郎はキリスト教の洗礼を受けたが、同年3月に欧化主義から国粹主義へ転換していく時期に、さまざまな要因が関係して北越学館が事実上閉鎖されたので退学した。山川丙三郎は出村悌三郎と歩いて米沢を経て仙台に向かい、山川は東北学院予科一年生に、出村は東北学院本科一年生にそれぞれ編入した。山川丙三郎は労働会に入会して寮に入り、新聞配達や牛乳配達などをして苦学した。

1895年3月に東北学院予科を卒業し、同年4月に東北学院文科専修部に入学し、英文学を専攻して、1897年3月に同文科専修部を卒業し、同年4月に東北学院図書館図書係として就職した。

1899年10月に上京して、憲兵司令部付陸軍通訳となった。1904年6月に陸軍を退職して渡米し、同年8月にはサンフランシスコにあるカリフォルニア大学パークレー校で学位

取得を目的としない特別科に入学した。そこではイタリア語、フランス語、古代フランス語、ドイツ語、古代英語、中世英語、英語、ギリシア語、ラテン語などを学んだが、住み込みの料理人などをしながら学業を続けた。1908年4月にはアメリカで高校教師の資格となる高等教育資格試験を受けて合格した。同年10月には同じくサンフランシスコ・パークレーにある太平洋神学校に入学し1年半在籍した。

1911年に帰国して、東京・雑司が谷の二軒長屋の八畳一間に住み、ダンテの『神曲』の翻訳に没頭した。同時に、30年近くアメリカで暮らして帰国したキリスト教の神秘的な思想家の新井奥遼<sup>おうえい</sup>の門下生となり、奥遼の私塾である謙和舎の読書会に加わって多大な影響を受けた。<sup>(12)</sup>それは仙台の東北学院に赴任する1919年まで9年間続いた。そこには足尾鉍毒事件で名を馳せた田中正造も別格の門下生として出入りしていた。<sup>(13)</sup>

ダンテの『神曲』の翻訳は壮絶であった。無収入の赤貧の中で、在米中の友人の鈴木重久・田島堅固・榊原政雄らの支援を受けていたが送金はしばらくすると底をつき、さつまいもと小麦粉を混ぜた団子を食事として、寸暇を惜しんで翻訳に従事した。また、謙和舎の永島忠重と柳敬助も物心両面から支援した。こうして、1914年に『神曲・地獄篇』が警醒社から出版された。注は三分の一に削除されたが、それでも注だけで百頁を越えていた。これは中山昌樹訳の『神曲』全編が出版される3年前の出来事で、我が国で最初の『神曲』の翻訳であった。

翌年1915年の39歳の時に、北蒲原郡本田村本田426～427番地の医師、渡辺護・善の長女なお（直）と結婚した。<sup>(14)</sup>なおは17歳年下の22歳であった。尚、なおの伯母の渡辺つうは丙三郎の長兄錠太郎に嫁いでいた。結婚後は本郷区駒込神明町に住む医師の次兄雄二郎の家から駒込道坂町の二軒長屋に移り住んだが、物は何一つなく、足袋まで兄の借り物であった。丙三郎は食事の時間以外は、朝から晩まで『神曲』の翻訳に沈潜していた。無収入の間は友人からの無利子の借金で生活していた。

やがて、1917年に『神曲・浄火篇』が警醒社から出版された。そこで、山川丙三郎は出村梯三郎の度重なる懇請を受け入れて1919年に東北学院の英文科教授として迎えられた。こうしてようやく生活は安定し、また多額の借金も返済することができるようになっていった。そして、1922年に『神曲・天堂篇』が警醒社から出版されたが、その中で翻訳出版は篤志家の多額の献金によっても可能となったことを感謝して報告している。また、その訳業に対しては、極めて高い評価が寄せられた。<sup>(15)</sup>

この間に、1916年には長男浄が、1918年には次男純が、1921年には長女恵が誕生したが、二人の息子は太平洋戦争で戦死し、娘はハワイに在住している。

その後、1929年には岩波書店からダンテの『新生』が出版され、1940年には東北学院を定年退職して名誉教授の称号を授けられた。最晩年の山川丙三郎は、『神曲』の改訳を行っていたが、完成の道半ばであった。だが、その未完の原稿も依頼した人に紛失されて

しまった。山川丙三郎は1947年8月17日に71歳で病死し、仙台市北山墓地の山川家の墓に埋葬された。妻のなおは1978年に亡くなった。

その後、1948年に岩波文庫版の『新生』、1952、53、58年に岩波文庫版の『神曲』（上巻・中巻・下巻）が出版され、1993年に大空社から警醒社の初版本『神曲』が復刻出版された。

## 2. 山川丙三郎のダンテ『神曲』との出会い

山川丙三郎は、生涯のどの時点でダンテの『神曲』に関心を持ち、また関心を深めていったのだろうか。

第一に考えられるのは、北越学館時代である。山川丙三郎は北越学館に1889年9月から1892年3月まで二年半在籍した。山川が入学する一年前の1888年9月に、内村鑑三は北越学館の仮教頭（実質的な校長）として赴任してきた。だが、3ヵ月もしないうちに北越学館事件を起こして宣教師と対立して新潟を去っていった。内村鑑三は不敬事件を起こした年の1891年12月に「ダンテとゲーテ」という論文を『六合雑誌』に発表した。これは日本でダンテを紹介した最初のエッセイであった。山川丙三郎は北越学館ではキリスト教や英米文学やヨーロッパ文学に関する目が開かれていったと思われる。その証拠に、キリスト教に回心して洗礼を受けるが、この時代にダンテに直接的に深い関心を持つには至ったかは不明である。ダンテはまだ訳されておらず、英訳でしか近づけなかったからである。

第二は、東北学院時代である。これは1892年9月から1897年3月までの学生時代の前半と1897年4月から1899年9月までの図書館員時代の後半に分けられる。学生時代の最後の1896年から1897年の間に島崎藤村が東北学院の英語教師・作文教師として教えており、藤村は東北学院の教師時代の1897年に『若菜集』を出版した。『神曲』の翻訳の文体は文語訳聖書の文体の影響が顕著であるが、鷗外や藤村の影響を受けたことはその文体からも分かる。<sup>(16)</sup> 藤村を通して、次に述べる 鷗外の翻訳についての言及からダンテの『神曲』の話を知っていた可能性は否定できない。<sup>(17)</sup>

第三は、憲兵司令部付陸軍通訳時代である。これは1899年10月から1904年6月までの時期である。東北学院出身者の読書会を通して、当時話題となっていた文学について様々なテーマが論じられていたと思われる。また、この読書会で英訳のダンテ『神曲』を読んでいた可能性がある。1892年から冒頭にダンテ『神曲』が出てくる森鷗外訳のアンデルセン『即興詩人』が「しがらみ草紙」に連載され始め、やがて1902年にはまとめて出版された。山川丙三郎は、アンデルセンの『即興詩人』などを通してダンテに対する憧憬が高まっていた可能性は極めて高い。また、既にアメリカ留学以前に新井奥遼に出会っていた可能性があり、もしそうだとすると、奥遼と丙三郎の霊的な出会いは、ダンテ『神曲』

への傾倒を深める契機となったのかもしれない。

第四に、カリフォルニア大学バークレー校と太平洋神学校の留学生時代である。1904年8月から1911年までのアメリカ留学時代に、イタリア語を始めとする欧米の語学ばかりでなく、『神曲』の背景となる西洋古典文学や中世文学も学んでおり、ファウラー教授の指導の下でダンテ研究も行っている。さらに、アメリカ留学から帰国後には、『神曲』の翻訳に従事し没頭しているの、アメリカ留学では幅広く学んではいるが、すべては最終的にダンテ研究に収斂していくものであった。

### 3. 結びに：山川丙三郎と新発田

我が国で最も優れたダンテの『神曲』の翻訳者であり、ダンテ学者で英文学者であった山川丙三郎は、現在の新発田市（旧加治川村）上館出身であり、敬和学園の精神的前身である北越学館の出身でもあった。しかも、その忠実な伴侶のなおも現在の新発田市（旧豊浦町）本田出身であった。その上、山川丙三郎の親しい三歳年上の先輩で同じ北越学館の出身で、共に徒歩で仙台の東北学院に向かった出村悌三郎も新発田市五十公野出身であった。出村悌三郎は、貧窮の中で悪戦し『神曲』の翻訳で苦闘している最中の山川丙三郎を、深い友情と信仰によって東北学院英文科教授として迎え入れた。

山川丙三郎・出村悌三郎・旧姓渡辺なおの出身地である上館・五十公野・本田は、日本一小さな櫛形山脈の端から五頭連峰へと繋がる山裾に静かに横たわる集落であり、広い田と田に挟まれてはいるが、旧出羽街道（現在の国道290号線）に沿って連なる隣り村同士であった。彼らは故郷を離れた土地で活躍し、故郷に帰ることは多くはなかったが、異郷の地で同志として骨を埋めた。それ以来、故郷では彼らのことを知る人はいないが、新発田が生んだ人々の中に、その生涯と文学的業績と共に、これらの人々の名前を加えて心に深く刻む必要がある。

\* 本稿は、2006年4月24日に、新発田ロータリー・クラブで講演した卓話「新発田が生んだダンテ研究家―山川丙三郎について」に注などを多少加筆したものである。このような機会を与えて下さったプログラム・ディレクターの新井明学長ならびに新発田ロータリー・クラブに感謝の意を表したい。



新発田市本田の山川なお（旧姓渡辺なお）の実家跡地。  
二軒の家の間にあった。



新発田市上館の山川丙三郎の実家跡地。  
七葉中学校の北側。

## 註

- (1) 山川丙三郎の業績は、母校の東北学院大学図書館のダンテ文庫に遺品をはじめとする関係図書が集められ、その業績が覚えられている。
- (2) イタリア文学の碩学である河島英昭氏による新訳が現在『図書』（岩波書店、2005年5月号以降）に連載中である。また、アリストテレス研究を始めとする倫理学の碩学の今道友信氏による『ダンテ『神曲』講義』（みすず書房、2002年）は、最近の興味深い『神曲』入門書・研究書の一冊である。
- (3) 代表的なバラードは、A. Quiller-Couch (ed.), *The Oxford Book of Ballads*, Oxford: Clarendon Press, 1910, に収められている。Cf. Sir Walter Scott, *Marmion*.
- (4) 山田耕太「宮沢賢治「銀河鉄道の夜」とダンテ『神曲』」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第4号（2006年）、59-73頁。
- (5) 生涯に関する伝記的資料として、本間絢子「山川丙三郎」（『昭和女子大学紀要(近代文学史料研究・外国文学篇)』第131編、1962年、41-60頁）は、多くの資料や取材に基づいているが、基本的な事柄で誤りが多く信頼性に欠ける点がある。以下では、石川重俊「山川丙三郎先生中心年表」ならびに筆者が作成した拙い年表を比較しつつ補っている。
- (6) 1878年に蒲原郡は北蒲原郡に変わり、1955年に加治村は加治川村に変わった。1888年の上館村の戸数は80戸、人口は605人であった。
- (7) 山川丙三郎の生まれた旧宅が、新発田市（旧加治川村）上館（道下）乙61-2番地付近一帯の新発田市立七葉中学校北門東側にあったことを2006年9月21日に石川重俊先生と共に上館の古老を尋ねて探し当てた。国道7号線加治川を渡った坂道下の上館神社の信号を左手に入った左手。かつて上館には山川姓が一軒しかなかったことを地元の古老に聞き、旧宅の前の家で90歳を越える寝たきりのご老人は「山川様」の家が、道路を挟んで反対側にあり、そこにはかつて丙三郎の長兄の「鋌太郎」が住んでいたことを証言して下さった。なお、このご老人が、新発田が生んだ画家の木村哲三の『農婦』のモデルであったこと（その絵は長岡の新潟県立近代美術館に収められている）、また「山川様」の家が30年程前まで建っていたことを家人が証言して下さった。
- (8) 詳しくは山川英夫作成「山川家略系図」参照。
- (9) 現在の新発田市立加治川小学校の前身。
- (10) 新発田町商業学校は、現在の新発田市民文化会館の所にあった。

- (11) 北越学館は、キリスト教主義の学校であったが、現在の新潟県立中央高校の所にあった。
- (12) 石川重俊「山川丙三郎訳ダンテ『神曲』と新井奥遼の言葉（1）」『新井奥遼著作集』第5巻月報5、2001年、7-13頁、石川重俊「山川丙三郎訳ダンテ『神曲』と新井奥遼（2）」『新井奥遼著作集』第1巻月報6、2002年、12-20頁、参照。尚、新井奥遼については、『新井奥遼著作集』全9巻別巻1、春風社、2000～2006年;新井奥遼（工藤直太郎訳）・福田興（編）『内観祈祷録・奥遼先生の面影』青山館、1984年;永島忠重『新井奥遼先生』大空社、1991年;播本秀史『新井奥遼の人と思想』大明堂、1996年、参照。
- (13) 新井奥遼の影響を受けた人々の中には、謙和舎の弟子たちを除いて、柳宗悦、岸田劉生、野上弥生子らがあり、とりわけ高村光太郎がいた。
- (14) 本田村本田は旧豊浦町本田（現、新発田市本田）、豊栄方面から月岡温泉に入る手前の集落、集落の中心に本田小学校がある。2006年9月21日に地元の古老の証言により、旧宅跡地を石川重俊先生と探し当てた。渡辺医師宅は集落の中心からやや外れた所にあったが、現在は残っていない。現在はその生垣が邸宅の跡を物語っている。
- (15) 例えば、詩人の高村光太郎は「あなたの訳を見ては、自分のものは恥ずかしくてとてもお送り出来ない気がして来ます。」と礼状のなかで述べている、高村光太郎「山川丙三郎宛書簡」『黒』1985年3月号、55頁。
- (16) 石川重俊「山川丙三郎訳ダンテ『神曲』及び『新生』—文体と改訳—」『東北大学英学史年報』第15号（1994年）、1-52頁、参照。
- (17) 石川重俊「恩師 山川丙三郎先生」セリタ研究所『東北学院英学史年報（15号）付録、1-32頁、1993年、特に12-13頁参照。